

弟日姫子譚

岩 田 芳 子

一 弟日姫子譚の構成

『肥前国風土記』松浦郡の条は、松浦郡篠原村に住む弟日姫子と新羅遠征の途中に篠原村に立ち寄った大伴狭手彦との悲恋譚を載せる。その内容は次に示すように新羅へ出征する大伴狭手彦と弟日姫子との別離譚（A）とその後日譚（B）とからなる。両者の関係性を考察することを通して、弟日姫子譚の内容について検討したい。

A (1) 鏡渡かがみのわたり北北在在郡郡昔者、槍隈廬人野宮御宇武少広国押楯天皇之

世、遣大伴狭手彦連、鎮任那之國、兼救百濟之國。奉命到來、至於此村。即娉篠原村篠、謂弟日姫子志弩一成

婚早部君等祖也。容貌美麗、特絶人間。分別之日、取鏡与婦。々含悲啼、渡栗川、所与之鏡、緒絶沈川。因名鏡渡。

(2) 褶振峰ひれりのみね在在郡東、峰処。大伴狭手彦連、発船渡任那之時、弟日姫子、登此、用褶振招。因名褶振峰。

B 然、弟日姫子、与狭手彦連相分、経五日之後、有夜、每夜来、与婦共寝、至晓早帰。容止形貌似狭手彦。婦

抱其怪、不得忍黙、窃用統麻繫其人欄、随麻尋往、到此峰頭之沼辺、有寝蛇、身人而沈沼底、頭蛇

而臥沼脣。忽化为人。即語云、

志努波羅能 意登比売能古素 佐比登由母 為祢弓牟志太

夜 伊幣爾久太佐牟 也（篠原の 弟姫の子を さ一夜も

率寝てむ時や 家に下さむ）

于時、弟日姫子之従女、走告親族、々々發衆、昇而看之、一蛇并弟日姫子、並亡不存。於茲、見其沼底、但有二人屍。一各謂弟日姫子之骨。即就此峰南、造墓治置。其墓見在。

（肥前国風土記）松浦郡

A (1)は、宣化天皇の御世に任那・百濟への遠征という勅命を賜った大伴狭手彦が、途中松浦郡の篠原村に至り、その土地の美しい女、弟日姫子と婚姻したこと、狭手彦が出征するために弟日姫子と別れる日に「鏡」を与えたこと、しかしその「鏡」は弟日姫子が栗川を渡る時に緒が絶えて川に沈んでしまったことを語り、それに因って、そこを「鏡渡」と名付けたと語る地名起源譚である。A (2)は、狭手彦の乗る船が発する時、弟日姫子が登って褶振りをした峰を、弟日姫子の行為に因って、「褶振峰」と名付けたという地名起源譚である。しかしBは地名起源譚ではない。弟日姫子が狭手彦と別れた五日後、狭手彦に似た男が弟日姫子のもとに通いはじめる。怪しく

思った弟日姫子は窃かに男の衣の襦に「統麻」を繋げ、翌朝それを辿ったところ、褶振峰の頂の沼に至る。その脣には「身人・頭蛇」の異形の者が臥して居り、姫子の前で人と化す。驚いた従女が姫子の親族に告げ、親族は衆人を連れて沼に登るが、蛇も弟日姫子も亡せて、沼底に「人の屍」を見つけただけだった。その「骨」を弟日姫子のもものとして、峰の南に墓を造り置いたという譚である。

A別離譚とB後日譚とは、Bにおいて弟日姫子のもとに通う男が「狭手彦似」とされていること、男につけた「統麻」をたどって行き着いたところがA(2)で褶を振った峰であることから、一連の展開として構成されている可能性が高い。即ち別離の日、弟日姫子は大伴狭手彦から「鏡」を渡されたのち、そのまま篠原村を出て鏡渡を経由して峰に上ったと推測され、A別離譚を背景としてB後日譚が展開していることが考えられる。AとBは時間的にも空間的にも連続性があると推測される。というのも、Aにおける地名起源譚の由来が弟日姫子の行動にあるからである。弟日姫子の足どりから、鏡渡のある栗川は、篠原村と褶振峰との境界域であったと認められる。弟日姫子の住む地が「篠原村」と明記されていることからすれば、鏡渡も褶振峰も弟日姫子が訪れたことよって人々の注目を集めた地であることを意味しよう。これは言い換えれば、弟日姫子以前には人々が、より厳密に言えば若い女性が訪れるような地ではなかったということでもあろう。鏡渡や褶振峰は、何故そのような地とされていたのであろうか。また、弟日姫子は、何故人々が訪れないような地に出かけたのであろうか。

松浦郡、現在の東唐津市にある領巾振山は鏡山の別称とされ、褶振峰に比定される。ただし篠原村・栗川(鏡渡)の地名は残らない。



資料「唐津市・東松浦郡の遺跡分布図」(部分)

『末盧国—佐賀県唐津市・東松浦郡の考古学的調査研究—本文編』六興出版、昭和五七年

*□内の比定地の注は論者による

この鏡山（褶振峰）を中心として松浦地域の実際に即して当時の状況を考察してみたい。資料「唐津市・東松浦郡の遺跡分布図」は唐津湾周辺遺跡調査委員会が昭和五七年にまとめたものである。鏡山は、晴れた日に登ると頂上付近から海岸線が一望できる大変見晴らしのよいところであり、弟日姫子が狭手彦の乗る船を見送る為にこの地を選んだのは当然かと思われる。ただし、遺跡の分布を示した資料の図によると、鏡山（褶振峰）の南には墳墓が集中している。褶振峰付近における墳墓の集中は、唐津地方全体の分布状況から見ても当該の地域に特徴的である。この事実は、Bの後日譚において弟日姫子の墓の場所が峰の南に造られたことと符合する。すなわち褶振峰（鏡山）は墳墓に隣接する地である。このことは、その地が日常的には人々の意識から遠ざけられた場所であることを考えさせられる。まして若い女性が訪れるような地ではなかったのではないかと思われる。一方、栗川は鏡山の西を流れる松浦川に比定されており、地形的に納得される。資料「遺跡分布図」に見える現在の松浦川の川筋は慶長年間に灌漑整備・改修されたものである。古代には鏡神社（鏡山の西）の西側より虹ノ松原の中ほどを河口としており、洪水の度に流れの変わる不安定な川であったとされる。栗川はそのような古代の流れを代表する川であったのだらう。褶振峰と鏡渡との位置関係は、鏡山と松浦川の関係と対応させることができる。篠原村の所在地は現在未詳とされるが、弟日姫子が栗川を渡って峰へ至っていることを考えると、川の西側に想定できる。すなわち、川を堺にして、西側は弟日姫子たちが住む生活の場であり、東側は人々の寄り付かない墳墓の地という地理的状况が把握される。

弟日姫子譚におけるこうした地理的状况を把握すると、何故、弟

日姫子は峰に向かったのか、途中の渡での事故はこの譚の中でどのような位置づけを持つのかが問題になる。それが地名起源になるほどの強い印象を人々に与えているからである。そこに後日譚との関係の有無も問われるのではないか。

二 大伴狭手彦と弟日姫子

松浦郡に滞在し、弟日姫子と婚をなした大伴狭手彦は豪族大伴金村の一子であり、後に大將軍として任那・百濟へ遠征して成功を収めた記録が、『日本書紀』に見られる。

（宣化天皇）二年冬十月壬辰朔、天皇以_三新羅寇_二於任那_一、詔_二大伴金村大連_一、遣_三其子磐与_二狭手彦_一、以助_二任那_一。是時磐留_二筑紫_一、執_二其国政_一、以備_三三韓_二。狭手彦往鎮_二任那_一、加_二救_三百濟_一。

（宣化紀）

宣化朝において、勅命を受けて、磐が三韓に備えて筑紫で国政を担い、狭手彦が任那・百濟に赴いて新羅の侵攻を鎮圧したという。この記述は「肥前国風土記」の「檜隈廬入野宮御宇武少広国押楯天皇之世、遣_二大伴狭手彦連_一、鎮_二任那之國_一、兼救_三百濟之國_二」と合致する。弟日姫子の恋は、海外遠征を成功に導くという華やかな成果を上げる、その狭手彦に対するものである。さらに狭手彦は欽明朝にも高麗へ出征した記載を持つ。欽明天皇二三年正月に新羅が任那の宮家を討ち滅ぼした為に、天皇は夏六月に新羅誅殺を誓い、七月には大將軍紀男麻呂宿禰と副將川辺臣瓊岳を遣わす。男麻呂は百濟と結んで勝利するが、瓊岳は新羅の捕虜になるという思わしくない結果をもたらしている。そして天皇は、つづく八月には大伴連狭手彦を大將軍とする高麗討伐軍を送っている。

八月、天皇遣^二大將軍大伴連狹手彦^一、領^二兵數萬^一、伐^二于高麗^一。狹手彦乃用^二百濟計^一、打^レ破高麗。其王踰^レ牆而逃。狹手彦遂

乘^レ勝以入^レ宮、尽得^二珍宝之路^一、七織帳、鉄屋^一還來
日本云、鉄屋在高麗西高樓
上。織帳張^レ於高麗王内寝以^二七織帳、奉^レ獻於天皇^一。以^二甲^一二領、

金飾刀二口・銅鑲鐘三口・五色幡二竿・美女媛^一也。并其從女吾

田子^一、送^二於蘇我稻日宿禰大臣^一。於是大臣遂納^二二女^一以為
レ妻、居^二輕曲殿^一。鉄屋在長安寺。是寺不知在何國。一本云、十一年、
大伴狹手彦連、共^二百濟國^一、驅^レ却高麗王陽香於比津留郡。

(欽明紀)

「大將軍」として数万の兵を率いて高麗を打ち破り、宮中の珍宝などを日本に持ち帰ったという狹手彦の活躍ぶりは、その名を国内に轟かせたに違い無い。遠征の成果については『日本書紀』の記述と史実に齟齬があるともされるが、伝統ある有力氏族の子弟であるだけに、軍事的な勝利と数々の宝物をもたらした狹手彦は、その出征を見送った松浦の人々にとっても英雄として語り継がれていたであろうことが推測される。その狹手彦が婚をなしたのが篠原村の弟日姫子である。狹手彦が天皇の勅命を被る身分の高い男であるのに対し、弟日姫子はA(1)の割書に「早部君等祖也」とある。早部君は開化天皇の皇子、日子坐王の後裔とされるが、弟日姫子に力ある父母や兄弟の存在などは語られず、Bの後日譚から「従女」や「親族」のあることが知られるばかりである。遠く、高貴な身分に繋がるとはいえ、恵まれた環境にはなかったであろう弟日姫子の不安定な立場が推測される。天皇の信頼厚く海外遠征という華やかな活躍ぶりを背景とする男と、地方の恵まれない環境の美しい女との恋という構図をまず読み取ることができよう。

三 形見の「鏡」

弟日姫子が狹手彦から「鏡」を与えられたのは二人の「分別の日」であった。「鏡」は『萬葉集』に、

：たらちねの 母が形見と 吾が持てる 真十見鏡に 蜻領巾
負ひ並め持ちて 馬替へ 吾が背
(13・三三二四)

と見え、馬と交換できる位の価値がある貴重品であったと考えられる。有力豪族出身の狹手彦が別離に際して弟日姫子にこのような貴重な配慮が考えられるのかもしれない。しかし、そうであれば、弟日姫子はそれほど貴重な品を身に着けて人の行かない峰に向かって川を渡るといふ行動をとるであろうか。かりに貴重だとしてもそれを身に着けて持ち歩く意味を考える必要があるのではないであろうか。

一般に「鏡」は身だしなみを整えるための道具として認識されていると考えられるが、古代における「鏡」の用途は一通りではなく、祭祀で掛鏡を神拝するなどの宗教的な場での利用や、奉納品や副葬品として埋納されるなど、呪具であることが知られている。「鏡」にそのような側面が見られた根底には、表面に物の姿を映し出すその機能や光を反射させるといったその特質が、「鏡」に神秘性を感じさせたことがあったであろう。「鏡」に関する「古事記」の次の例は、「鏡」のそうした呪術的な側面をよくあらわしている。

爾、天宇受売白言、益^二汝^一命^一而貴神坐故、歡喜咲樂、如此言之間、天兒屋命・布刀玉命、指^二出其鏡^一、示^二奉天照大御神^一之時、天照大御神、逾思^レ奇而、稍自^レ戸出而、臨坐之時：

(神代記・天の石屋)

高天原における須佐之男命の乱暴狼藉に怒り天の石屋に隠れた天照大御神に対して、「汝が命に益して貴き神の坐す」と偽つて、「鏡」に天照大御神自身の姿を映し、「奇し」と思う大御神を石屋から外部へ招き出している。それは「天香具山之真男鹿之肩」の骨を「香具山之天之波波迦」を焼いて占わせた時に御幣として布刀玉命が捧げた「鏡」である。天照大御神は自身の姿を映したその「鏡」を、同じく御幣に捧げた「八尺の勾璣」及び「草那芸劍」と共に、天孫邇々芸命が葦原中つ国に天降る時に与えている。

於_レ是、副_レ賜其遠岐斯_以音_{此三字}。八尺勾璣・鏡及草那芸劍、亦、

常世思金神、手力男神、天石門別神_而詔者、此之鏡者、專

為_二我御魂_一而、如_レ拜_三吾前_一、伊都岐奉、次、思金神者、取_二

持前事_一為_レ政。此_二柱神者、拜_一祭佐久々斯侶伊須受能宮_一。

自佐至
能_レ以_レ音。

(神代記、天孫降臨)

天照大御神は邇々芸命に「鏡」を与える際に「我御魂」として自身に仕えるように齋き奉れと命じている。天の石屋を出たときに天照大御神の姿を映した「鏡」であることが、天照大御神の御魂とするきっかけとなっていることに注目したい。このことは「鏡」が天照大御神の姿を映しただけでなく、その魂もうつしとり「鏡」に内在させていることを考えさせる。「鏡」を齋き奉るとき、そこには、内在する天照大御神の姿が見えるかのごとく感じとられたのではない。

『萬葉集』は「鏡」について次のように詠む歌を載せている。

真十鏡見ませ吾が背子吾が形見持てらむ辰に相はざらめやも

(12・二九七八、寄物陳思)

離れている夫に向かって「吾が形見」の「鏡」を見る事を勧め、「相わない」ということがあるでしょうかと慰めている。ここには、「形見」の「鏡」に自分の姿が映り、夫と「相ふ」ことが可能であるという期待が窺える。そのような「形見」としての「鏡」には、天照大御神の姿を映すことでその御魂をうつしとった「鏡」の呪性と類似の要素が推測される。つまり、「形見」としての「鏡」には以前映し出した者の姿が映り出るといふ発想があったのではないか。相手の魂をも映しとるものという「鏡」への信憑が「形見」であることを意味づけていると考えられる。そして狭手彦が弟日姫子との別れに贈った「鏡」もそのような「形見」であったのではないか。

弟日姫子はその大切な「鏡」をそこに付けられた「緒」が絶えたことで「栗川」に沈めてしまう。「鏡」に付随した緒が絶えるという例は上代文献では他に見当たらないが、衣の紐や緒が絶える例は見られ、『萬葉集』では恋人との関係の断絶を暗示する場合がある。

白細布の我が紐の緒の絶えぬ間に恋結び為む相はむ日までに
(12・二八五四、人麻呂歌集)

「紐の緒」が絶えないうちに「恋結び」をして願いをかけようと詠むことには、「紐の緒」が絶えることに男女の仲が絶えることがかけられていることがわかる。

河内女の手染めの糸を絡り返し片糸に有れど絶えむと念へや
(7・一二一六、寄絲)

右の例は「糸」を糸車に絡る作業が続くように、細い片糸のようであつても自分の恋の思いが「絶え」ることがないとその恋への執着心を詠んでいる。ほかに「玉の緒」は動詞「絶ゆ」の枕詞として見え(3・四八一高橋朝臣、11・二三六六古歌集、11・二七八七、

二七八八、二七八九、11・二八二六、12・三〇八三、いづれも男女關係を暗示している。

狭手彦の「鏡」の「緒」が「絶ゆ」とあることは狭手彦と弟日姫子の關係が「絶ゆ」であることを象徴した表現ではないのか。「形見」の「鏡」を川に沈めてしまうことにより、弟日姫子自身はもはや「鏡」を通して直接狭手彦の魂に逢うことはかなわない。

四 褶振りの呪力

弟日姫子が栗川を渡るときに、「鏡」が「沈川」という記述は「鏡」が川底深く、弟日姫子には手の届かない、或いは見えない位置に沈んだという意味とそれを拾うこともできずに急いで峰に登って褶振りを行ったという意味とを併せ持つ。褶振峰、現在の鏡山からは、唐津湾の海岸線を一望でき、眼下に出港する船を臨みつつ「褶」を振った弟日姫子の姿が想像される。ただし、この峰は前に述べたように、当時人々が訪れる土地ではなかったと推測され、弟日姫子は独りでその地を訪れたと考えられる。勅命を受けて新羅に出征する大伴狭手彦一行の船出は見送りの人々で賑わっていたはずである。しかし、弟日姫子はその賑わいから独り離れて、わざわざ栗川を渡り、急いで峰に登ったのである。ここには大伴狭手彦一行の船出を独りで見送らなければならぬ弟日姫子の事情、すなわち人々と共に公的な見送りが許されない弟日姫子の立場が推測され、越えがたい身分差のある二人の恋の実態が浮き上がる。

『萬葉集』には天平二年の大宰帥大伴旅人と別れる筑紫の遊行女婦兒島の作があり、その状況は弟日姫子の場合と類似している。

冬十二月大宰帥大伴卿上京時娘子作歌二首

凡ならばかかもせむを恐みと振りたき袖を忍びてあるかも

(6・九六五)

大和道は雲隠りたり然れども余が振る袖をなめしと思ふな

(同・九六六)

右大宰帥大伴卿、兼任大納言、向京上道。此日馬駐水城^一、願望^二望府家^一。于^レ時、送^レ卿府吏之中有^二遊行女婦^一、其字曰^二兒島^一也。於^レ是、娘子傷^二此易^レ別、嘆^二彼難^レ會

拭^レ涕自吟^二振^レ袖之歌^一

身分の違いをわきまえて、旅人との別れを人知れず惜しむ兒島の嘆きを、吉井巖氏は「人をかえて繰り返される都の貴族と地方の女との別れの日常的な体験」として人々に受け入れられていたとされる。兒島は見送りの人々の中に居て「振りたき袖」を振れないことを嘆くが、弟日姫子は「振りたき褶」を振るために殆ど人が足を踏み入れない峰に登ったのだらう。大伴狭手彦と篠原村の弟日姫子の悲恋譚が形成される背景に社会的な共通理解があったとすると、弟日姫子は兒島と同様の職掌の女として把握されていた可能性があろう。弟日姫子が峰から振った「褶」は、女性が頸から肩にかけて垂れる装身具であるが、「ひれ」を振ることで蛇や呉公や蜂を鎮めたという神話が『古事記』に見える。

於^レ是、其妻須勢理毘売命、以^二蛇比礼^一 二字以^レ授^二其夫^一云、其蛇將^レ昨、以^二此比礼^一三拳打撥。故、如^レ教者、蛇、自靜。故、平寢出之。亦、来日夜者、入^二呉公与蜂室^一、亦、授^二呉公蜂之比礼^一、教如^レ先。故、平出之。 (神代記)

「蛇比礼」「呉公蜂之比礼」と名付けられたそれは、「褶」と同じ性質を持ちながら、呪具として使われている。それを振って蛇・呉

公・蜂を退散させたことは、「ひれ」を振ることに生き物の鎮魂としての呪的作用があると考えられていたことを示している。一方で「旧事記」では、「死人」を生き返らせる呪具にかざえられている。

天神御祖教詔曰、若有「傷処」、令「茲十宝」(贏都鏡・辺都鏡・八握劍・生玉・足玉・死反玉・道反玉・蛇比礼・蜂比礼・品物比礼)一謂「二三四五六七八九十一」而布瑠部、由良由良止布瑠部、如「此為」此者、死人反生矣。是則所謂布瑠之言本矣。

(天神本紀)

右の二例は「比礼」を振ることに魂を操る呪的な意味があることを示し、それは鎮魂或は魂呼たまひよひという両面性をもつことを考えさせる。その呪力は自然物をも対象としたらしく、応神記には天之日矛が新羅からもたらした物の中に「振」浪比礼、振「風比礼、切」風比礼」が見え、その「比礼」自体が伊豆志之大神とされていることから、海上を行く舟に向かつて「ひれ」を振ったとき、その呪的な行為によって航海の安全を祈願する意味をもつことを考えさせる。また「萬葉集」にも「ひれ」が詠まれている。

視渡せば近き里廻をたもとほり今ぞ吾が来る礼巾ひ振りし野に

(7・一二四三)

旅立ちの時に家人が「礼巾」を振った野に帰ってきた、というこの歌からは「ひれ振り」が別れるとき旅立ちの相手に向かつて行われたことが知られる。別れて行く相手に自らの思いを伝えようとする行為は、「袖振り」としても見える。

汝が恋ふる妹の命は飽き足らに袖振る見えつ雲隠るまで

(10・二〇〇九、「七夕」人麻呂歌集)

「ひれ」を振る行為は古くは鎮魂或は魂呼ひという呪術的な要素を

もち、やがて別れの儀礼として定着し、その後「ひれ」だけでなく「袖」がその位置を占めるようになったと推測される。

弟日姫子の「褶振り」は新羅遠征に出立する狭手彦に向けられたものであり、別れの行為であっただろう。が、そこに「振招」とあることに注目したい。弟日姫子が村を出て川を渡ってまで峰に登ることに「褶」を「振招」いたとあるのは、狭手彦に対して別れ難い思いを伝え、戻ってくることを願うての行為であったろう。出航後再び弟日姫子のもとへは戻らない相手であることを充分承知しながら、それでも狭手彦を「振招」かずにはいられない、そうした状況での別れの行為であった。峰に向かう弟日姫子の目的は、この「褶振り」にあり、前の鏡渡での事故はその途中の出来事と解される。

Bの後日譚において褶振峰は「身人・頭蛇」の異形の者が棲む場所として語られる。その者は狭手彦出航の五日後に狭手彦の姿をして弟日姫子の許を訪れる。それはこの「褶振り」の五日後でもある。前に栗川を境とする篠原村と褶振峰との地理的状况を述べ、生活を営む場所と墳墓の地という区別の存することにも触れた。その墳墓の地に「身人・頭蛇」の者が棲んでいたという後日譚は褶振峰が日常生活とは異なる怪しい地として了解されたことを考えさせる。弟日姫子はその地で呪的な行為でもある「褶振り」を行ったのである。その「褶振り」が呪的な力を持ちえたとなれば、対象となりえたのは「身人・頭蛇」の魂と、栗川に沈んだ「鏡」の中の狭手彦の魂であろう。弟日姫子の「褶振り」によって魂が呼び出されて「鏡」の表面に狭手彦の姿が映し出された可能性を推測できる。訪れる人のない峰に住む「身人・頭蛇」の異形の者は弟日姫子の「褶振り」によって目覚めさせられ、弟日姫子の姿を垣間見て恋心をおこし、

峰や川を徘徊する間に「鏡」の中の狭手彦の姿を見て狭手彦に化したのであろう。『肥前国風土記』松浦郡の条が、Aの「鏡渡」「褶振峰」の地名起源の由来を弟日姫子の行為に求め、それに続けてB後日譚を語るの、こうした事情を踏まえていると読むことができると思われる。

五 後日譚の展開

B後日譚は弟日姫子が「褶振り」をした峰を舞台に、弟日姫子の悲劇を語る。狭手彦が出航した五日後から夜毎訪れる狭手彦似の男を怪しく思った弟日姫子は、「統麻」をその人の欄に繫^かける。翌朝、「統麻」をたどって行き着いた先は、「褶振り」をした峰にある沼のほとりであり、探し当てた男の正体は、峰に棲む「身人・頭蛇」の異形の者であった。弟日姫子は峰が異形の者の居処であることを初めて知ったのである。本来は峰を居処とする異形の者が、栗川という境界を越えて弟日姫子が生活する村に現われ得たのは、前に述べたように弟日姫子が「褶振り」をしたことによる呪力の働きが、異形の者を目覚めさせると共に、境界に沈んだ「形見」の「鏡」に狭手彦が映り出る効果をもたらし、異形の者の知るところとなったためであった。狭手彦と弟日姫子は相手に思いを伝え、別れを惜しむ方法として、「鏡」を与え、「褶」を振った。しかし「鏡」と「褶」の呪力は思いがけない悲劇へと弟日姫子を導いている。後日譚を地名起源との関わりにおいて見ると、それは弟日姫子の行為の結果に他ならない。境界域である栗川と人の訪れない褶振峰でのそれぞれの行為、「鏡」を沈ませることと「褶」を振ることは呪性を内在させて、その土地の未知の部分への影響を予感させているだろう。す

なわち、それぞれの「もの」の呪力に起因する結果への予感である。その結果にこそ、峰に棲む者が狭手彦に似た男として現われる契機があったのである。B後日譚はA(1)・(2)における弟日姫子の行為を受けて展開する。

峰の沼のほとりで寝ていた「身人・頭蛇」の異形の者は糸をたどって訪れた弟日姫子の姿を認めると、忽ちに人と化して弟日姫子への執着を次のように歌っている。

篠原の 弟姫の子そ さ一夜も 率寝てむ時^{ひと}や 家^{しだ}に下さむ

右の歌は、異形の蛇が沼に行き着いた弟日姫子に対して「一夜でも共に寝た上で家に帰らせようぞ」のように「下さむ」の「む」を異形の蛇の意志とするか、「一夜でも共寝をしようと思ったときは、わが家（沼の中）へ下し沈めることになろうか」と「家」を異形の者の居処と解して次に起こる事態を予測している歌とするか、解釈が分かれてきたが、近年、木下正俊氏が「『ヤ・ム』を含む一人称主格の疑問文」は「腑甲斐ない自分の『現在』のあり方をじれったく思いつつそれをどうすることもできない」という内容の文型であると論じられ、それを受けて佐佐木隆氏はこの歌が「一夜寝たら、もうその時には帰さなくてはならないのか」という不本意な心情を表明したもの」とされており、弟日姫子への執着を窺わせる解釈として納得できると思われる。が、この場合、何故「一夜」（原文「比登由」）という限定が詠まれるのであろうか。

一般に婚姻生活は日常としてあって、一夜という限定を持たない。婚姻生活に一夜という限定をもつ例は一夜限りの共寝によって神の子を妊娠する一宿婚、すなわち神婚を想起させる。一宿婚には天孫邇々芸能命が木花之佐久夜毘売と「一宿、為^レ婚」（神代記）て火

照命ら三神を生む話や、『常陸国風土記』那珂郡の晡時臥山伝説で努賀毘売が「一夕懐妊」で神の子を生む話があり、神が妻を覚める神婚の一形式と考えられる。弟日姫子譚の歌は、異形の者と弟日姫子の関係が一宿婚という神婚の形式に通じること考えさせるが、異形の者みずから「さ一夜も」と歌って弟日姫子への執着を露わにしていることからすると、神婚と見る事には無理がある。むしろ、弟日姫子が一夜の共寝を前提とする事情をもった女性であることを考えさせ、遊行女婦的な側面を窺わせる。

神婚以外で一夜を詠むのは次のような場合である。

細紋形 錦の紐を 解き放けて 数多あまたは寝ずに ただ一夜のみ

(紀歌謡六六)

右は允恭天皇が衣通郎姫に詠んだ歌である。衣通郎姫の姉である皇后をはばかりて、天皇は衣通郎姫を近江の坂田に住ませ、密かに通って行く。「一夜のみ」は密かな逢瀬故に、「数多」を望みながら果たせない事情があつて、その一夜の共寝をいとおしむ心情である。玉葛絶えぬものからさ宿ねらくは年の度りにただ一夜のみ

(萬葉集) 卷十・二〇七八、「七夕」

彦星と織姫星も「一夜のみ」という限りある逢瀬を惜んでいる。いずれも「一夜」だけである事を恨む心情は、そうせざるを得ない事情を抱えていることに対するものである。一宿婚では、神との婚姻という非日常性が結果的に一夜という特殊な事態を招いている。非日常という点では衣通郎姫や織姫星の婚姻も共通性を持つが、前者には少ない逢瀬を恨むといった感情が介入した例は見られない。遊行女婦もまた、非日常的な世界に住むといえるが、遊行女婦児鳥は表には出せない別離の情を詠んでいた。弟日姫子も大伴狭手彦と

の別離の方法において、その婚姻が日常的に認められる関係でないことを示していた。歌における、異形の者の憤りは、神婚の形式を知りながらも異なる望みを抱えていることを示し、この者が神ではないことを表面化させている。そして、「家に下」すと表明しながら、結果的にも弟日姫子を殺してしまっていることは、異類であることの要素の一つとなるのではないか。弟日姫子自身も遊行女婦的な側面を窺わせて、神に相応しい女性としては描かれていないのである。

B 後日譚における異形の者と弟日姫子との異類婚としての展開は、A 別離譚での弟日姫子の行動と、「鏡」と「褶」に内在する呪力を契機とする、鏡渡と褶振峰の地名起源譚で構成されている。そこには、非日常の土地とそれを区切る境界という把握がある。弟日姫子譚がこのように理解される背景には、後の大將軍大伴狭手彦という歴史的人物と土地の女弟日姫子の恋が、二人の越え難い身分差によって成就しないものであるという了解があることを考えさせる。ここに二人の恋は成就するものではないことを読みとれる。「鏡渡」と「褶振峰」の地名起源譚は、栗川を境界として彼岸に当たる「褶振峰」を訪れた弟日姫子の行為への恐れに発せられている。境の川を渡り、人々が忌避する峰に登ることは、恐らくは村の禁忌を犯すことであつたろう。ここに弟日姫子の生きるすべはなく、自らの行為が招いた異形の者によって命を奪われ、その屍は峰の南に葬られる。弟日姫子譚は『風土記』において、鏡渡と褶振峰の地名起源譚として語られているが、その本質は弟日姫子の別離譚と悲劇的な異類婚姻譚としてあると考えられる。「現在」も残るとされる弟日姫子の墓は、弟日姫子譚が現実にあつたことを裏付ける証拠として意味をもつ。

注(1) 唐津湾周辺遺跡調査委員会編『末羅国 佐賀県唐津市・東松浦郡の考古学的調査研究』六興出版、昭和五七年

(2) 吉井巖氏「サヨヒメ誕生」『天皇の系譜と神話』二、塙書房、昭和五一年

(3) 『古事記』には開化天皇系に意祁都比売戸の皇子として日子坐王が見え、その皇子と沙保大闇見戸売との子沙本毘古王を日下部連の祖とする。又『新撰姓氏録』では日下部宿禰が「開化天皇皇子彦坐命之後也」(山城皇別)「出自開化天皇皇子彦坐命也」(撰津皇別)と見え、日下部連が「彦坐命子狭穂彦之後也」(河内国皇別)に、日下部連と同祖述する日下部氏も河内皇別に見え、又日下部首は日下部宿禰の同祖として和泉国皇別に見える。

(4) 吉井氏前掲注(2)

(5) 秋本吉郎氏校注『日本古典文学大系 風土記』昭和三三年

(6) 西宮一民氏・岡田精司氏『鑑賞日本古典文学 日本書紀・風土記』角川書店、昭和五二年

(7) 「斯くや嘆かむ」という語法』『万葉集研究』第七集、塙書房、昭和五三年

(8) 「『さ一夜も率寝てむしだや家に下さむ』」『萬葉語と上代語』第二章付章三、ひつじ書房、平成一一年

受贈雑誌(一)

愛知教育大学大学院国語研究

愛知教育大学国語教室

愛知県立大学説林

愛知県立大学国文学会

愛知淑徳大学国語国文

愛知淑徳大学国文学会

愛知大学国文学

愛知大学国文学会

青山語文

青山学院大学日本文学会

歌子

実践女子短期大学日本語コミュニティケーション学科

宇都宮大学語論究

宇都宮大学国語教育学会

愛媛国文研究

愛媛県高等学校教育研究会国語部会

愛媛国文と教育

愛媛大学教育学部国語国文学会

王朝細流抄

安田女子大学大学院古代中世文学研究会

大阪大谷国文

大阪大谷大学日本語日本文学会

大阪大谷大学大学院日本文学論

大阪大谷大学大学院文学研究科

叢

大妻国文

大妻女子大学国文学会

大妻女子大学紀要

大妻女子大学

大妻女子大学大学院文学研究科

大妻女子大学大学院文学研究科

論集

岡大國文論稿

岡山大学文学部国語国文学研究室